

兵庫県立横尾救急病院展

2020年2月1日〈土〉–5月10日〈日〉



《想い出劇場》2007年 | 個人蔵 (横尾忠則現代美術館寄託)

【関連イベント】

神戸労災病院健康フェア

健康測定(「骨密度測定」「血圧・動脈硬化度測定」とデジタルサイネージでの放映
(「内視鏡検診のすすめ」「人間ドックのすすめ」)を行います

日時:2月8日〈土〉11:00–17:00(定刻より早く受付を終了する場合があります)

会場:当館オープンスタジオ

※無料、先着順

イベントの詳細やその他のイベントの詳細は当館HPなどでご確認ください

兵庫県立美術館 | 展覧会スケジュール

特別展

ゴッホ展

2020年1月25日〈土〉–3月29日〈日〉

コレクション展

小企画 | 塩売りのトランク マルセル・デュシャンの「小さな美術館」

特集 | もうひとつの日常

2019年11月23日〈土・祝〉–2020年3月1日〈日〉

※兵庫県立美術館の特別展又はコレクション展の有料チケット半券ご提示で、
当館の企画展を団体割引料金でご覧いただけます(詳細はHPなどでご確認ください)

編集後記

横尾さんをゲストキュレーターに迎えた自我自損展。

11/28には横尾さんによる公開制作も行われ、大盛況のうちに閉幕いたしました。

公開制作の様子は次号にてたっぷりとお伝えします! (尾崎)

兵庫県立横尾救急病院は、美術家・横尾忠則の肉体と生活・創作との関係を探ることを目的に、横尾忠則現代美術館に期間限定で開院いたします。

当院では、頭や心よりも肉体感覚を通して得られるものに信頼を置く横尾さんの生き方を基本理念に、眼科、小児科、外科など様々な診療科をご用意し、絵画、版画、ドローイング、著書や愛読書といった幅広い作品と資料から、皆様に肉体との付き合い方を見つめ直す機会をご提供することを目指します。

特色の一つである入院病棟では、喘息、不眠、骨折、帯状疱疹、顔面神経麻痺など大小様々な病歴を持つ横尾さんの「病気」にまつわる作品や、病床での日記、入院中のスケッチなどをご紹介します。突然襲いかかる怪我や病気は、横尾さんにとって単に忌むべき存在ではなく、ときに人生の危機を救い、自己の生活や芸術を見つめ直すきっかけを与えてくれるものでもありました。また80歳を越えた現在、肉体の問題はとりもなおさず老いの問題と重なります。当院では、横尾さんが直面する難聴や視力低下といった肉体の変化にも目を向け、老いと創造の関係を探究することにも努めて参ります。

五感を通じて学んだ幼少時代から老いを見つめる現在まで、実生活や創造の現場における横尾さんの肉体に対する意識を探る当院の試みが、皆様の健康増進の一助となりましたら幸いです。

なお、当院では医療行為は行なっておりませんので、あしからずご了承ください。

林 優 | 当館学芸員

講演会「健康学入門 ～宇宙船人間丸 創造マニュアル」

アートに造詣の深い医師の稲葉俊郎氏によるユニークな健康学入門

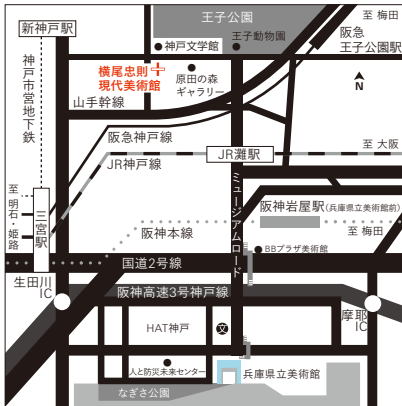
講師:稲葉俊郎(東京大学医学部附属病院循環器内科助教)

日時:3月7日〈土〉14:00–15:30

会場:当館オープンスタジオ

定員:100席(当日先着順)

※聴講無料



Y+T MOCA

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30
Tel: 078-855-5607(総合案内) Fax: 078-806-3888
www.ytmoca.jp

横尾忠則現代美術館ニュース Vol.23

2020年1月24日発行

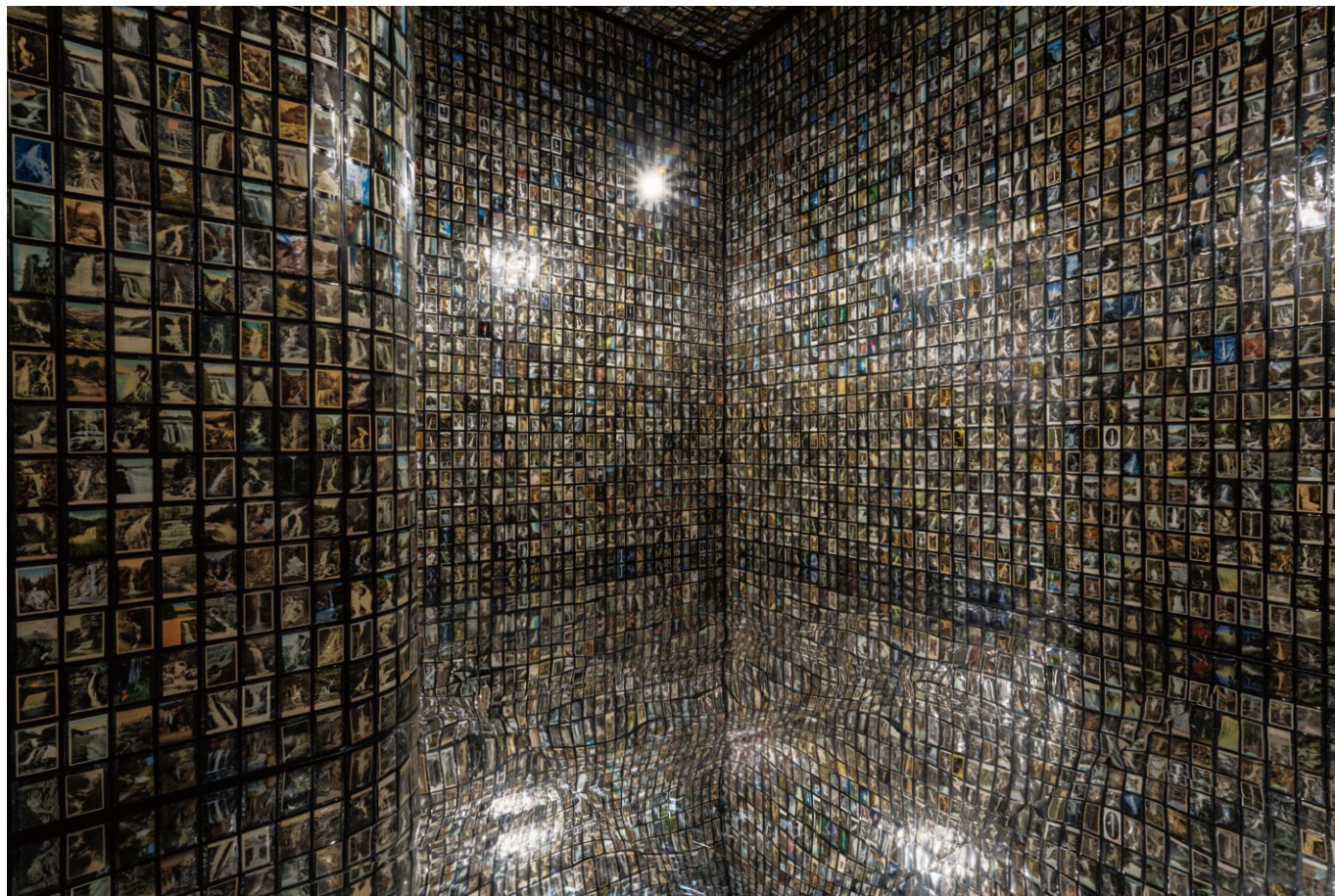
編集・発行:横尾忠則現代美術館

印刷:岡村印刷工業株式会社

the Y+T times

横尾忠則現代美術館ニュース

Yokoo Tadanori Museum of Contemporary Art *NEWS LETTER*



Special Report 横尾忠則 自我自損展 ゲストキュレーター:横尾忠則

Topics

最近の横尾さん

Event Report

01 狂言と、狂言のお話

02 ワークショップ「みんなでファッションショー！」

Column

01 インターンシップ & 博物館実習

02 作品・資料の保存と活用7

Editor's Choice

アーカイブルーム・MUSEUM SHOP

Preview

兵庫県立横尾救急病院展

23

2020.1.24

Information

次回展関連イベント

兵庫県立美術館 展覧会スケジュール

Special Report

横尾忠則 自我自損展

YOKOO TADANORI: THE END OF EGO

curated by Yokoo Tadanori



ポスターのメインビジュアルにもなった巨大自画像がお迎え

本来この展覧会は、2018年秋に「横尾忠則 自我自賛展」として開催を予定していたのですが、横尾さんが多忙を極めたため、一年遅れでようやく実現したものです。最大の特徴は、横尾さんが自らキュレーションしていることです。キュレーションとは、要するに展覧会をつくることを意味し、おおまかにいうとテーマを決め、それに基づいて出品作品を選ぶことがまず重要です。

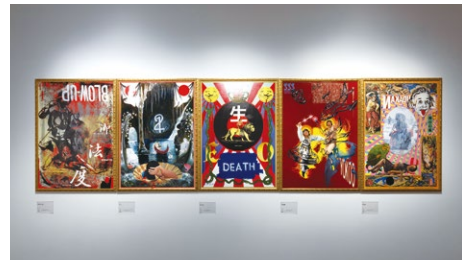
実は横尾さんは、我々学芸員の仕事を物足りなく思っていたようです。言い訳しますと、そこにはアーティスト(美術家)とキュレーター(学芸員)の違いがあると思います。アーティストの場合は、何物にも束縛されず、自由に発想することが何より重要です。キュレーターにももちろん発想の自由さは必要ですが、一方で展覧会を現実のものとして実体化させなければ意味がありま

せん。経験を積んだ学芸員ほど、「あ、これは予算オーバーやな」「これをやるにはちょっと時間が厳しいな」というふうに、瞬間的に予測できてしまうのですが、横尾さんからすれば、それはある意味で創造性を欠いた、妥協の産物にみえたのかもしれない。

そういう訳で、作家自らのキュレーションによる本展は、画期的な試みである一方、予測不能な恐怖がありました。恐らく、代表作を惜しげもなく大集合させた「ベスト・オブ・ヨコオ」みたいなものになると思っていたのですが、実際にはずいぶん様子が異なりました。驚くべきことに、未公開のものや、描きかけの未完成作品、さらに本人ですら存在を忘れていたようなレアなものもたくさん含まれていたのです。よく知られた作品よりも、自分でも気づいていない自分を再発見したい、ということでしょうか。

ちなみに横尾さんにインタビューしたところ、展

覧会のコンセプトは「コンセプトがないのがコンセプトです」、作品を選んだ基準は「その日の気分です」との答えが返ってきました(もし筆者が同じことをいったら、間違いなく館長に激怒されるでしょう)。展覧会タイトルも「自画自賛展」から「自我自損展」に変更されました。横尾さんの造語で、エゴ(自我)の制約を乗り越えることを意味しています。事実、本展のために描き下ろされた新作群は、多くが過去の自作に加筆し改変したものです。「LOVE」「MONEY」などの英単語が描き加えられ、どちらかというと深刻で重厚だった画面が、一気にポップで軽やかな(同時にシニカルな毒もある)作品へと変貌しています。これらはまさに「自画」を「自損」する行為であり、常に自己変革を求める横尾さんの姿勢がよく表れています。

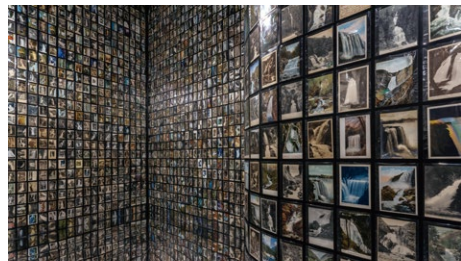


グラフィックを絵画化する「ポスター・ペインティング」のシリーズ

また2019年の5月に東京のギャラリーで発表された新作群が、関西で初公開されたのも見どころのひとつです。緻密な再現描写を放棄した、曖昧で茫洋とした作品は、完成しているのか未完成なのかよく分からない不思議な表情をたたえています。かつて横尾さんにとって、細密描写は得意中の得意でした。デザイナー時代の作品のなかには、顔の皺の一本一本までも執拗に描

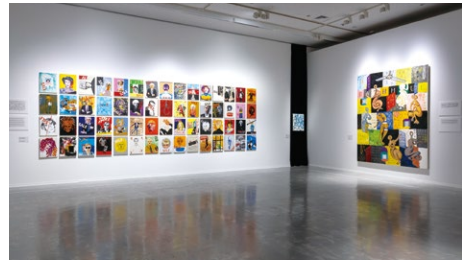


自身の旧作やインドの看板職人に発注した作品に加筆したシリーズ



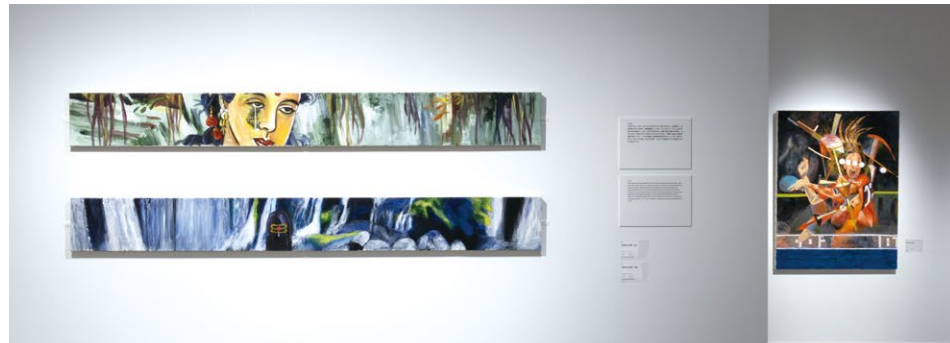
約1万枚のポストカードによる《滝のインスタレーション》

実は横尾さんは、幼い頃にいわゆる子どもらしい絵を描いた記憶がないそうです。現存する最古の作品、絵本『宮本武蔵』の模写をみると、5歳児とは思えない正確な再現描写に驚かされます。物心つく前の子どもにとって、「自己」と「世界」という対立概念は恐らく存在しません。世界を分節化せず、曖昧な全体性として捉えることで、横尾さんは、かつてやり損なった「子どもらしい絵」を、改めて取り戻そうとしているのかもしれませんが。それはまさに「自我自損」的な挑戦だといえるでしょう。



最新作《A.W. Mandala》と銭湯シリーズ。矩形の集積が響き合っています

山本淳夫 | 当館館長補佐兼学芸課長



異様に横長の「滝のシリーズ」。2点とも初公開です



謎めいたカーテンの演出も横尾さんのアイデアです

Topics

最近の横尾さん

彫刻の森美術館で特別対談

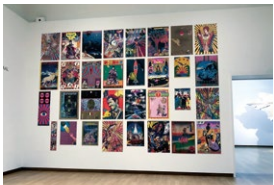
彫刻の森美術館（神奈川県箱根町）の開館50周年を記念して開催された「ちょうこくの森 アートライヴ2019」において、美術史家の高階秀爾さんと横尾さんとの特別対談「ピカソ クロストーク」が行われました。会場は昨年の夏に全面リニューアル工事が完了したピカソ館。対談ではピカソの作品をはじめ、ベラスケスやマネといったピカソが参照した過去の画家たちの作品と、それらを引用した横尾さんの作品がスライドで紹介され、それぞれの画家による表現の違いが対比的に論じられました。横尾さんの新作《戦場の昼食》も紹介され、マネの《草上の昼食》がインドの神々の世界として表現されていることや、マネ作品の片隅に描かれた蛙や鳥が、奇想の画家・曾我蕭白の描くガマガエルや燕に置き換わっていることなどが明らかに。作品の内部に深く入り込んでイメージを取り込み、自在に変換する姿勢はピカソ以上と、高階さんも驚いていました。



「ピカソ クロストーク」（2019年8月1日、彫刻の森美術館）
写真提供：彫刻の森美術館

アムステルダム市立美術館の展覧会に出品

アムステルダム市立美術館（ステデリック・ミュージアム）にて開催の「Colorful Japan」展に、横尾さんのポスターが出品されています。同館はヨーロッパにおいて横尾さんの作品をいち早く紹介した美術館の一つで、1974年にはポスターの個展を開催しています。本展には同館が所蔵する日本のポスター226点が集結。横尾さんのポスターは会場内の一壁面にまとめて展示され、異彩を放っていました。



「Colorful Japan」展示風景

林 優 | 当館学芸員

出版、連載もラッシュです

『週刊朝日』にて連載中！ 瀬戸内寂聴さんとの往復書簡

旧友同士の思い出や笑い話、老いに関すること、そして死後の世界についてなど、尽きることのない話が過去・現在・未来を自在に往還しながら展開されています。何気ない会話の中に散りばめられた、文学や芸術、生や死についての妙味溢れる言葉のキャッチボールは、果たしてどこまで続くのでしょうか。



『横尾忠則×九位經典創作者的 生命對話』（大田出版）

台湾版『創造 & 老年』の受賞

瀬戸内寂聴さん、磯崎新さん、細江英公さんら、いずれもオーバー80歳のクリエイター達と横尾さんとの対談集『創造 & 老年』（台湾版）が、台湾の書評サイト「OPENBOOK 閱讀誌」で「2019年美好生活好書獎（良い本の賞、という意味）」を受賞しました。受賞を受けて、横尾さんは「創造することが人間を健康にし、ひいては寿命を伸ばし、長寿が約束されるという内容です。どうぞ皆様も、創造することを生活の中に取り入れてください」とメッセージを寄せています。

小説「原郷の森」も『文學界』誌にて好評連載中

アトリエ近くの緑地公園がいつの間にか「原郷の森」へと変貌し、ピカソやキリコ、三島由紀夫ら、横尾さんに縁のある芸術家たちが時間・空間を飛び越えて入り乱れる、前代未聞の小説です。様々な芸術家たちとの対話を通じた、横尾さんの美術に対するクレド（信条告白）であり、美術評論であると同時に哲学書でもあるという、従来のカテゴリーに分類不可能な独自の文学作品は、まさに必読です。

『月刊神戸っ子』でも新連載がスタートします

1961年に創刊された『月刊神戸っ子』が2020年に通巻700号を迎えるのを機に、2月から横尾さんの新連載がスタートします。就職から結婚までを過ごした神戸の街について、果たしてどんな話題が飛び出すのでしょうか。

山本淳夫 | 当館館長補佐兼学芸課長

Column 01 インターンシップ & 博物館実習

夏の風物詩となりました、神戸芸術工科大学のインターンシップと甲南大学及び武蔵野美術大学の博物館実習が今年度も実施されました。インターン生4名と実習生12名・総勢16名の参加です。今回は複数のグループに分かれての活動となったため、「人食いザメと金髪美女一笑う横尾忠則」展開催期間、展覧会の展示替え期間、「横尾忠則 自我自損」展開催期間と、実習時期によってそれぞれのグループが美術館の異なる一面を目にすることとなりました。

当館が管理するアーカイブ資料調査や撮影を通して、学校の授業では体験することのできない美術館における研究活動の基礎を学びますが、今回は「滝のインスタレーション」の準備や展示作業に直接携わったグループもありました。実際に資料を取り扱う際に漂う緊張感は、毎年どの学生にも共通しています。今後開催予定の展覧会に使用する物品調査にも挑戦し、学芸員が長い時間をかけて小さな準備を積み重ねている場面にも立ち会いました。また、清掃や虫害調査といった館内の環境整備などを実際に体験することで、作品や資料を守ることの難しさや、そのために美術館の裏側で日々行われている細やかな業務の重要性を実感していただけたのではないのでしょうか。

博物館学芸員資格修得を目指している、または美術館の仕事に関心をもつ皆さんが、実習を通して美術館の活動への理解を深め、それぞれが得た学びや気づきが社会に還元されるよう、職員一同、毎夏試行錯誤を重ねています。



様々なアーカイブ資料の調査・整理



「滝のインスタレーション」の展示作業

井上佳那子 | 当館学芸員補助

Column 02 作品・資料の保存と活用7 —木枠への張り込み—



《自然の生理（女）》《自然の生理（男）》



箱に収納された状態

広げた状態

「自我自損展」では滝を描いた作品が勢揃いしましたが、《自然の生理》もその1つ。2点とも今回の展覧会が当館初お目見えで、それまではひっそりと収蔵庫の中で眠っていました。

この2点が保管されていた箱は、全長約3mの作品が収められているとは思えないほど小さく、恐る恐る蓋を開けてみると、絵画がロール状に丸めて収納されていました。広げてみるとキャンバスだけのベラベラな状態。とても展覧会に出せる姿ではありませんでした。そこで作品を固定させるため、木枠を特注で製作することになりました。

細長い木枠は通常よりも歪みやすいと予想されたので、真っ直ぐな無垢材を選択し、しっかり厚みを持たせました。そうして厚みを持たせた分、今度は絵画周辺の余白（側面）に、木枠へ張り込むための充分な余裕がなくなり、新しい余白を付け足す必要が出てきました。

作品の裏面から四辺にぐるっと新しいキャンバス地を当てがい、絵画用の接着剤で取り付け。余白幅を広くした後、木枠へ張り込みました。作品保護に繋がる安定した固定ができ、鑑賞の面でもぐっと見栄えが良くなりました。

キャンバス作品は木枠やパネル等に固定されていないと、絵具が乗っている面がどうしても不安定になり、絵具層に

亀裂や剥離が生じやすくなります。丸めて保管しておくことも、もちろん作品へ負担をかけますので、今後はこの木枠に張った状態で収蔵庫へ収められます。

津崎みぎは | 当館学芸員補助



上 | 新しいキャンバス地の取り付け
下 | 木枠への張り込み作業

EVENT REPORT 01

「狂言と、狂言のお話」

2019年7月13日(土) 14:00-15:00 | オープンスタジオ(1F)
出演:〔第1部〕茂山千之丞(太郎冠者)、茂山七五三(次郎冠者)、鈴木実(主)
〔第2部〕茂山七五三、茂山千之丞



第1部の狂言「附子」より

展示中の横尾さんの掛け軸がお話の中に登場するサプライズもあり、会場は大いに盛り上がりました。第2部のトークは、スーパー狂言のあらすじと装束・道具類の解説に始まり、上演時の裏話や原作者の梅原猛さんや横尾さんとの交流など、当事者ならではの貴重なエピソードが満載。笑いのプロの話術に、会場があたたかな笑いで満たされました。

平林 恵 | 当館学芸員

※長年にわたり茂山千五郎家を率いてこられた五世茂山千作さんが9月21日にご逝去されました。
心よりご冥福をお祈りいたします。

Editors' Choice 01 アーカイブルーム



事前の準備作業を行う学芸スタッフ

アルバムの全ページを撮影し枚数をカウント、各ポケットに整理番号カードを挿入するなど、約2ヶ月に渡る地道な準備作業は展示直前まで続き、展示室に四方を覆う黒いシートが設置された後、ポストカードを1枚ずつ展示していきました。通常、出品作品の展示は専門業者のスタッフが担いますが、「滝のインスタレーション」は学芸スタッフ総出で作業を行いました。最終的に約10,000枚を使用した展示が完成し、足元のミラーを覗き込むと360度滝のポストカードに囲まれ、まさに滝壺に落ちるような没入感が生まれました。今後別の場所で展開される際には、また違った表情を見せてくれるであろう「滝のインスタレーション」。「裏側」にも少し想像を巡らせてもらえれば幸いです。

井上佳那子 | 当館学芸員補助



スーパー狂言の装束の前で。
(左から茂山七五三さん、茂山千之丞さん、鈴木実さん)

EVENT REPORT 02

ワークショップ「みんなでファッションショー！」

2019年7月26日(金) 13:30-16:00
当館展示室、オープンスタジオ(1F)



上 | ポーズもバッチリ! 下 | とっても可愛い後ろ姿は…?

「人食いザメと金髪美女一笑う横尾忠則展」(2019年5月25日～8月25日)の2階展示室には、横尾さんの手掛けた「スーパー狂言」3部作の装束や道具類がずらりと並びます。まずは全員で展示室を回り、多種多様な装束を見てまわります。担当学芸員から「横尾さんが手掛ける装束は生き物(恐竜、王様)だけでなく、軍隊やお金などをテーマとして制作されることもある」との話を聞き、多彩なテーマで制作された装束に参加者は興味津々の様子です。

鑑賞後はデザイナーとなって、各自テーマを設定し衣装を制作。もちろんテーマは人に限らず、空想のものでもなんでもあり。私たちスタッフもどんなテーマが飛び出すのか、ワクワクしながら見守ります。

制作に入るとみんな黙々と作業に取り掛かり、付き添いの親御さんの手も借りながら、徐々に素敵な衣装が仕上がっていきました。

衣装が完成したら、今度はモデルに変身。まずは華麗にウォーキングするため、博物館実習生(スタッフとしてお手伝いいただきました)のお手本を見たり、ファッションショーの映像を見ながら勉強します。みんな初めての経験のようで、戸惑いつつも、ポーズのアイデアを考えながらイメージを膨らませていきました。

そしていよいよファッションショーが始まり、ここからはスタッフにとっても緊張の場面。何度もリハーサルを重ねてきましたが、トラブルはつきものです。不安な気持ちが多くありましたが、子供たちのやる気に満ち溢れた表情を見て、これは大丈夫だと確信しました。音楽が流れるとランウェイに素敵なおモデルさんたちが続々と登場!少し恥ずかしそうにしながらも颯爽と歩き、事前に考えたポーズを決めていきます。気になる衣装のテーマは「怪しい人」「馬」「シロクマ」「ウニ少女」などユニークなものばかり。とっても賑やかで楽しいファッションショーとなりました。

尾崎幸恵 | 当館学芸員補助

Editors' Choice 02 MUSEUM SHOP

ミュージアムショップに2つの新商品が入荷しました。どちらも素敵なおコラボレーション商品です。前田みのるさんとコラボレーションした「風呂敷 ART TOUR」は、横尾さんがこれまでに制作したポスターデザインやイラストレーション70点がデザインされており、一枚で横尾ワールドを存分に堪能いただける豪華な風呂敷。スカーフやインテリアとしてもご利用いただける万能な一枚となっています。

そして、カシミア専門アパレルメーカーCASHYAGE(カシヤージュ) とのコラボレーションに新作が登場しました。《6月27日の子宮内での出来事》(1995年)がデザインされたカーディガンと中央に大きくデザインされた「Y」の文字が目を引きインターシャセーター。カシミア100%のニットはとても暖かく、寒さが続くこの時期にぴったりです。ほかにも《酔いどれ船》デザインのカーティガンや《ヒキガエルと女》デザインのセーターもございます。是非ミュージアムショップにてご覧ください。



TADANORI YOKOOxCASHYAGE
左: インターシャセーター Y
右: カーディガン 6月27日の子宮内での出来事



風呂敷 ART TOUR

尾崎幸恵 | 当館学芸員補助